



# 平成 29 年 7 月 九州 北部 豪雨

## 災害支援中間レポート

### 被害概要

7月5日から6日にかけて、対馬海峡付近に停滞した梅雨前線に向かって暖かく非常に湿った空気が流れ込んだ影響等により、線状降水帯が形成・維持され、同じ場所に猛烈な雨を継続して降らせたことから、九州北部地方で記録的な大雨となりました。九州北部地方では、7月5日から6日までの総降水量が多いところで500ミリを超え、7月の月降水量平年値を超える大雨となったところがありました。また、福岡県朝倉市や大分県日田市等で24時間降水量の値が観測史上1位の値を更新するなど、これまでの観測記録を更新する大雨となりました。気象庁は今回の豪雨を、自然災害の命名基準には達しないが、特異な豪雨だったとして、7月19日に「平成29年7月九州北部豪雨」と命名しました。

\* 気象庁(2017)平成29年7月九州北部豪雨についてより抜粋

被害概要(消防庁情報:平成30年2月22日現在)

	人的被害	行方不明	全壊	半壊	一部損壊	床上浸水	床下浸水
大分県	3	—	49	274	5	158	883
福岡県 (うち朝倉市内)	37 (33)	2 (2)	275 (248)	831 (790)	39	22	594 (424)

\* 朝倉市は、一部損壊と床上浸水の件数は半壊以上に分類されます

\* 数値は速報値のため、今後変動する可能性があります



## 初動

7月4日から5日にかけて、関西地方から熊本県へむけての移動中に大雨の情報が入ってきました。気象情報やメディアの報道を確認し、緊急支援が必要になる可能性が高いと判断し、福岡県朝倉市周辺に目的地を変更、情報収集と緊急支援を行うため5日夕方に朝倉市甘木地域へ入りました。被災地域は福岡県と大分県にまたがる広範囲なものであり、また今までにない量の土砂と流木の発生で被害がさらに拡大。発災直後は朝倉市での物資支援の調整などを行いながら、被害が大きかった福岡県朝倉市・東峰村・添田町・大分県日田市などを視察しました。その中でも一番被害が多く支援の手が必要だと考えた朝倉市杷木地域を中心に本格的な緊急支援を開始しました。

以下に今回行った緊急期～移行期の支援をまとめました。



## 緊急支援

### 情報収集・共有 (2017年7月5日～11月末)



山間部の土砂崩れと平地の浸水被害などで、被害状況や地域の課題(ニーズ)の把握は更に難しくなっていました。市内各地域で異なるニーズと最新の状況を把握するため、頻りに各地域を訪問し、必要な支援・今後の見通しなどの情報をまとめ、関係団体への提言はもちろん、ネットなども使い情報を発信しました。特に広範囲にわたる被害と、これまでにない

量の流木や土砂、各地で寸断された生活インフラなど、今回の被害特徴を可視化するために朝倉市内の被害マップを作成しました。

\* 詳しくは「朝倉市被害・支援状況マップ」にて  
また、7月9日から始まった「支援者情報共有会議」にできるかぎり毎回出席しました。各地の状況を伝えるのはもちろん、他の参加者からの情報で被災地の全体像を捉えることに努めました。また、緊急期だけではなく今後の中長期的な支援の必要性やその対策など、一歩先の準備が行えるような提案やアドバイスを行いました。



## 支援の調整

### ・物資調整 (2017年7月5日～6日、7月7日～7月31日)



発災直後は特に孤立地域が多く、災害対策本部では食糧確保と配布が最大の課題でした。熊本の支援団体に連絡を入れ、食材・飲料水・衛生用品の緊急期に特に必要な物資に限って集めました。複数の団体から計トラック2台分の物資が集まり、朝倉市内で調整し提供しました。また被害を受けた地域の保育園などへ紙

おむつや水などの調整も行いました。

### ・避難所へ支援者の調整 (2017年7月6日～11月25日)

被害の大きかった杷木地区の避難所へ支援者を調整しました。避難所での混乱



解消や住民の抱えている課題のヒアリングを主に行いました。定期的に活動に参加する支援者を避難所につなぐことで被災者との関係性を作ることができ、より細やかなヒアリングが情報収集やニーズの把握につながりました。

・トイレカー調整(2017年7月24日～11月30日)

レスキューストックヤードを通じてトイレカー貸出支援の申し出がありました。被害が大きくライフラインの寸断が続く中、ボランティアの受け入れが始まった杷木松末地域ではトイレ設置のニーズがたくさんありました。移動が可能なトイレでかつ、限られた台数のため、生活を続ける住民のトイレとして設置したり、ボランティア受け入れ時の公衆トイレとして、多様な使い方を提案し、地域内の各地区の区長・行政担当者と連携を図り、受け入れを調整しました。



・重機ボランティア(プロボノ)調整(2017年7月8日～11月30日)

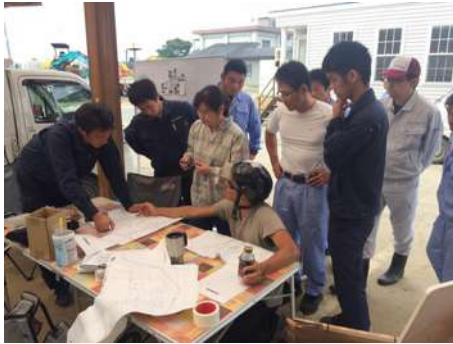
一般ボランティアでは太刀打ち出来ない大量の大木や土砂を前に、プロボノ(専門性の高いボランティア)の必要性は明らかでした。以前から交流のある災害支援団体「DRT-JAPAN」の朝倉市入りをきっかけに、重機ボランティア等のプロボノの調整を行いました。また、朝倉市へ申し出のあった重機ボランティアのリストを、情報共有会議を通じて共有してもらい、受け入れと現場の調整を行いました。



支援団体や個人の参加を合わせて、重機:501台、ダンプ:401台、2,331人の支援者の活動を調整しました。

\* 調整地区の詳細は P12「朝倉市被害・支援状況マップ」にて

## ・災害 NGO 結独自のボランティア受け入れ(2017年7月23日～11月30日)



災害 NGO 結としては初めて独自のボランティア募集を行い、HP と FB で 7 月 23 日から告知記事を掲載しました。独自募集は活動の拠点を確保できたこと・ボランティア受け入れを担当するスタッフの確保ができたことなどの要因が重なり実現に至りました。発災当初から朝倉市内でボランティア募集を行っていた団体が限

られていたためか、ネットで検索をして初めて災害支援に挑戦するというような方もいらっしゃいました。災害支援への入り口を広げるという点でも大きな意味があったと考えます。

## 移行期支援

### 地元支援者の育成(2017年9月～)

復旧活動のため数ヶ月に渡り支援受け入れ体制が必要なこと・2 次被害の防止・見守りやコミュニティ支援など長期的な支援が必要なことから、息の長い支援ができる地元支援者の育成が重要なポイントであると考えました。支援活動で出会った仲間を中心にその必要性を伝え、「黒川復興プロジェクト」と「杷木復興支援ベース」が立ち上げるきっかけ作りと運営サポートを行いました。特に 11 月に入り立ち上がった杷木復興支援ベースには、発災から行っていた支援活動の調整を引き継ぐと共に、支援のリソース(支援者・資機材など)もつなぎました。また、年始に「ハキトーーーク」と題して、支援の必要性の再認識と被災者から新たな支援者の発掘のためのイベントを行いました。



た。支援者・住民を交えて発災から半年の振り返りと今後の課題や支援の必要性を確認するためワークショップという内容にしました。この他にも、運営の主となるメンバーのミーティングへ参加など、相談・サポート役に回り、外部支援者から地元支援者



へと活動の主軸の移行をし、地元団体の基盤強化を図りました。

## 写真展「あの日」からはじまる写真展の開催(2018年3月)



市内の広域で被害がありましたが、被災をしていない地域も多くあります。特に人口の多い甘木地域は被災が少なく、被災が大きかった杷木地域などは距離もあり、日常生活の中で被災状況を目にする機会は減っていました。また被災した地区によっても被害状況が違い、温度差が生まれていま

した。まずは朝倉市内で今災害を俯瞰的に振り返り、現在の被災地域への関心を持ってもらうために写真展を開催しました。また春から梅雨までの期間に、2次被害対策・防災減災への取り組みを多くの人に考えてもらいたいという狙いもありました。そして発災から8ヶ月を迎える3月頭に実施し、写真提供のお願いや写真展の準備のお手伝いを募集することで、新しい形で支援に関わるきっかけとしました。

\* 詳しくは「あの日からはじまる写真展 実施報告書」にて

## 今後の朝倉の課題

被害を受けた地域は復興に向けて生活再建が始まりましたが、発災前から抱えている地域の課題が、被災により肥大化し、復旧期以降対策を迫られることも多くあります。災害 NGO 結では、地元団体の杷木復興支援ベース等の運営支援を続けながら、今後も継続的に朝倉に関わっていく予定です。

## 農業の再建

農家が多い朝倉市では、農地の被害も大きく、再建には時間がかかる見込みです。平成29年7月九州北部豪雨が激甚災害に指定されたため、農地の現状復旧をほぼ行政負担で進める事が可能になりましたが、復旧作業が始まるのはこれからです。野菜や米など作付けから収穫まで単年で行われる農地の復旧に比べ、収穫まで数年が必要な果樹は再建に更に時間がかかる場合もあります。農業従事者が高齢化していることもあり、再建まで待てないと離農するケースも。産業の衰退など問題が拡大していく可能性も高いのです。



## 長期避難者へのサポート

大規模な復旧工事が必要であったり、2次被害の危険性が高かったりすることから、10ヶ月経った現在でも地域に戻れた住民は多くありません。発災～避難所生活～仮設生活と避難生活も変化しています。地域を離れ避難生活をしている方の中には、自身で移動ができなかったり、生きがいや趣味の場を失ったり、隣近所との関係性が薄くなったり、と寂しい・不安な気持ちで過ごしている方も多いはずです。

発災後から目まぐるしく変わる生活の変化が落ち着き、気候も暖かく動き出したい気持ちとは裏腹に、やる事がないむなしさや悲しさを抱えている住民も多いのではと憂慮しています。

## コミュニティの再建

被害が大きすぎるために、生活インフラが整っていない地区がいくつも存在しています。特に山間部では発災前から人口減少の問題を抱えており、この被災で問題に拍車がかかった状態の地区もあります。集団移転という選択肢を選ばざるをえない地区もあるかもしれません。元の場所で生活再建が出来ないのであれば、こういった形でコミュニティを再建するのか、これまでの生活した地区を活用できないのかなど、住むか住まないかという0か100かではなく、コミュニティを維持・再建する方法を行政・住民と共に考えていくことが必要です。

## 二次被害への対応

今回の災害では、数百箇所です砂崩れが起こったと言われています。大きな被害に繋がらなかった場所・今は崩れていない場所でも、次の梅雨や台風シーズンで被害に繋がる可能性は十分にあります。また、被害が大きく仮設の橋を使っている場所も多く、今後の大雨が降ると簡単に橋が落ちてしまうことも考えられます。そんな中、自宅を再建し(もしくは被災を免れ)地域に住民が戻ってきたところもいくつか存在しますが、今後の避難が大きな問題になります。例えば災害前とは家族構成が変わったり、インフラ環境も異なったりする中で、度々避難勧告などが発令された場合、どのように対応・避難するといったのか。梅雨に入る前に地域で考え、想定しておかなければならない課題です。



## 寄付報告

九州北部豪雨発災後に災害 NGO 結へ寄せられた募金額

合計 **2,440,365 円**

(2017年7月7日～2018年3月31日)

皆さまからいただいたご寄付は、各種支援活動のための各種経費や団体管理費に活用させていただきました。あたたかいご支援、本当に感謝いたします!

(※)収支報告は別途 災害NGO結 ホームページ上の「年次報告書」内に記載しております。

### 【ゆうちょ銀行から】

記号 14760 番号 6772101 名称 サイガイエヌジーオー ユイ ユイ

### 【ゆうちょ銀行以外から】

店名 四七八 (読み ヨンナナハチ) 店番 478 普通 口座番号 0677210

## 広報実績

RKB 毎日放送「今日感ニュース “スコップを捨てた”ボランティア」(2017年8月24日)

RKB 毎日放送「今日感ニュースあの日からはじまる写真展」





八重山日報「九州北部豪雨被災地で写真展」(2018年3月8日)

## 前原氏(糸満在住)が代表の災害NGO



# 九州北部豪雨被災地で写真展

写真展を開催しているNGO結の  
前原代表-8日、福岡県朝倉市

九州北部豪雨の被災地支援を行ってきた糸満市在住の前原士武(とむ)さん(39)が代表を務める災害NGO結(ゆい)は、昨年7月の九州北部豪雨の発生当時から復興支援までの様子を振り返る写真展を、福岡県朝倉市中央図書館で開催している。期間は11日まで。被災地の同市で撮影された写真を中心に130枚以上が展示された。

会場では流木や濁流による当時の被害状況や、その後の懸命な救助活動、ボランティアや復興イベントの様子などを伝えていく。またタブレット端末による動画や地域コミュニティ協議会が制作した復興かわら版も展示された。

今回展示された写真は結が撮影したものだけでなく、市や地域コミュニティ、一般の方から提供されたものである。地元の高校生が写真の飾り付けや案内チラシなど手伝っていて、被災地住民と作り上げた写真展となっている。

前原さんは災害が発生した日から現地入りし、翌日には熊本からトラック2台分の食料を手配。さらに災害対策本部に対して可能な支援を提案した。東日本大震災の災害支援を行ったことをきっかけに、全国の自然災害現場での支援活動に携わっている。災害ボランティアセンターの立ち上げや運営の手伝い、地元の方々が中心になった災害復旧・復興を目指していくための土台作りを行っている。

前原さんは「あらゆる情報発信をしている。しかし防災や復興の意識を広めることは簡単ではない。まずは現地に行って、自分で見たり、においを嗅いだりすることが重要」と話している。

西日本新聞「3.11 胸に被災地駆ける」(2018年3月9日)

2018年3月9日(金) 新聞定価月300円(税別) 3.738円(税込) 4.037円(1部売) (消費税別) 新聞140円(税込) 50円

# 3.11胸に被災地駆ける

## 熊本、朝倉支援者下支え



被災した住民らの話を聞く前原士武代表(中央)

11日、福岡県朝倉市

九州豪雨の発生日から福岡県朝倉に滞在している一災害NGO結核の代表(39)は、被災者の話を聞いて必要な支援を考え、ボランティアを振り振る活動を行っている。かつてボランティアを「偽善」と思っていたが、今では自然災害が起きるたびに全国の被災地に駆け付け、ボランティアの受け皿役を担う。その原動力は東日本大震災にある。

### 団体代表前原さん 被災者と結ぶ

ツアアの添乗員だった2011年3月11日、修学旅行先の長野県のホテルで、津波や火災を伝えるテレビ目を奪われた。高校生を送り届けて埼玉県の自宅に戻ると、頭が浮かぶのは車や漁船が津波にのみ込まれる直前の映像。仕事の川下りのガイドで水に流された経験が何度もあり、苦しさは想像以上。「何か手伝いたい」。震災で仕事が当面なくなったこともあり、20日、福岡県朝倉市に入り、宮城野区のボランティアセンターを訪ねた。

「あの人ばかりがいのただけ生き残った女性に手渡した。これを持って私は生きます。その言葉に、ボランティアは単なる作業ではなく、被災者の心の支えにつながる活動だ」と思っ

「被災者の孤独死が続いた。若者が流出し、町づくりを増やしたい。災害を経験した人は、他の被災者にも優しくなる」。11日には朝倉市で竹籠に火をともし、由良と一緒に冥福を祈るつもりだ。(三事野)

ある現場にすぐ連れていく前原さんの周りに人たかりができるようになった。「人を動かす方が被災地のためになるのでは」。4月後半には、現場の声を聞き、センターと連携して人を振り振る調整役を担うようになっていた。

「ボランティア希望者は多いのに、受け皿が少なかった。自分がやろうと思った」。災害NGO結核を設立し、12年の九州北部豪雨、14年の広島土砂災害など10カ所以上でボランティア受け入れなどを支援した。熊本地震では被災者の孤立を防ぐと、交流拠点の運営やサロン活動も担った。朝倉市ではボランティア団体の拠点「一本木復興支援ハウス」を設立。自らのノウハウや人脈を地域の団体に引き継ぐ取り組みも行う。

忘れられない経験がある。東日本大震災での活動中、泥の中から子どもの積み木が見つかり、家族の中で1